

『こころ』戦争とマクベス

Junko Higasa 2015.6.13

第 41 章冒頭で、先生は K 自身の手から、彼の要塞の地図を受け取り、第 42 章で K の心に弾丸を打ち込んだ。第 43 章で K は覚悟を決めて、夜中に先生に声をかけた。それは最後の決断をする前の最善策の模索だったが、話すきっかけをつかめなかった。第 44 章で、先生はそれを「和平向上条約」再考へ向けた相談と受け取らずに、反撃の可能性に怯え対抗策を考える。第 45 章で奥さんに援軍を頼んで承諾を得る。第 46 章で援軍が準備を整えるのを待つ。第 47 章で援軍が K の要塞に決定打を打ち込む。第 48 章で今後の道を断たれた K は自決する。

この進行は、ローマ帝国の滅亡や、武家社会の権力闘争による政権崩壊に似ている。そして『こころ』執筆中には第一次世界大戦が始まっていた。独立国として存続するために天皇親政に終始した明治全期を生きた漱石は、日清、日露戦争と向き合ってきた。そして北海道に送籍して、徴兵を逃れている。究極、戦争は人の「心持ち」から始まる。先生のように一つの抑えきれない個人的な欲望から発する。

そして先生はマクベスのようだ。敵意のない者を疑心暗鬼で暗殺する。最終的な成功に到達するならばこの一撃が全てであり、来世のことなどどうでもよい。けれど裁きは常にこの世で下る。公平な神は、毒杯を用意した者の唇に、それを押し当てる。首謀者は自業自得ながら、不要な不幸は周りに波及する。